SNSを介した〈わたしたち〉をめぐる実践

——「ハーフ」あるいは「ミックス」の相互交流を事例に——

大阪市立大学大学院　ケイン樹里安

1　目的

アルジュン・アパデュライは移動し越境する人々の増大と電子メディアによる情報・イメージの氾濫が社会関係の根底的な変動をもたらしていると論じ、それを「切断」と呼んだ(Appadurai 1996＝2004)。彼によれば、「切断」後の社会においては、日常生活やアイデンティティをめぐる人々の想像力が新たな作動をはじめるという。では、現代日本社会における「切断」とはどのように現象し、また「切断」後の社会をわれわれはどのように社会学的に把握できるのであろうか。本報告は、「切断」の要件とされる移民の増大と電子メディアの普及という諸特徴が結びつく、ある極端な結節点を調査対象とすることで上記の問いに答えるための手がかりを示すことをその目的とする。本報告が調査対象とする、ある極端な結節点とは、一般に「ハーフ」などと呼ばれる人々のSNS（Social Networking Service）を介した相互交流の場である。多文化化が進展するなかで社会統合や社会的包摂が喫緊の課題となった現代日本社会において、「ハーフ」あるいは近年当事者たちが名乗る「ミックス」のSNSを介した相互交流の場は、「切断」の諸特徴が凝縮した結節点であると思われる。先行研究においては、「自分がもつアイデンティティ」と「他からみられるアイデンティティ」とのギャップによって、彼らが葛藤し、またその経験を相対化しうる場や機会の必要性が指摘されてきた（竹田 2013)。しかしながら、対面であれ非対面であれ、彼らの相互交流に関する議論は十分に蓄積がなされきたとは言い難い。

2　方法

本報告では、2012年12月から2013年11月末までの約1年間にわたって実施された、相互交流の場への参与観察と適宜行ったインタビュー調査によってえられたデータを用いる。

3　結果・考察

調査の結果、彼らは「ハーフ」あるいは「ミックス」という包括的なカテゴリーによって互いをカテゴリー化し、あるいは葛藤の経験を含めた彼らの社会的リアリティを「ネタ」として笑い合うことで共同性——〈わたしたち〉——を立ち上げるというトートロジカルな実践を行っていることが明らかとなった。すなわち、先行研究において指摘された葛藤経験は笑われるべき「ネタ」として扱われていたのである。しかしながら、それは葛藤経験を「ネタにできない」できない者の〈わたしたち〉からの排除をも伴っていた。また、彼らの相互交流の場や関係性はSNSを介することで立ち現われるが、それは個々人がパーソナル・ネットワークを構築し、維持し、切断するという動的な実践によるものであった。

「切断」後の社会において、人々はさまざまな資源を用いてトートロジカルに共同性を立ち上げるが、それは自らに適した〈わたしたち〉の立ち上げであるために、常にそこからこぼれ落ちてしまう他者を生み出してしまうのである。

参考文献

Appadurai, Arjun, 1996, Modernity at Large: Cultural Dimenshions of Globalization, Minnesota: The University of Minnesota.（＝2004, 門田健一訳『さまよえる近代——グローバル化の文化研究』平凡社.）

竹田美和, 2013,『グローバリゼーションと子どもの社会化——帰国子女・ダブルスの国際移動と多文化共生』学文社.